
君に捧ぐ歌

春月桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君に捧ぐ歌

【Nコード】

N7392D

【作者名】

春月桜

【あらすじ】

主人公の夢沢歌は、夢はボーカルになること。夢をかなえるためにバンド専用の学校に入った。そして、初めての恋をしてしまう。でも、その相手は、見た目も性格もほとんど違う人……。

君に捧ぐ歌 1（前書き）

間違った言葉や、間違った字があるかもしれませんが。どうか、見てほしいです。

これはもしかしたらいきなり展開が速いなと思ったりするかもしれませんがどうぞ見てください。

君に捧ぐ歌 1

君に捧ぐ歌

1、私の夢、それはボーカルになること。

この「バンドソング結成学校」はいつも歌を歌い放題の学校。

でも、それは、とても難しいこともある。

ただ歌ってるだけと思いがちだが、本当はとても大変。

バンドのことではとても厳しい。

種類は四つに分かれている。

ボーカル、ギター、ベース、ドラム。

この四つに分かれている。

私、夢沢 ゆめざわ 歌 うた。

私はボーカルになりたい。

私のお母さんもお父さんも有名なバンドの一員一枚のCDを100人ほどの人がその一枚のCDをあらそうぐらいの有名で人気のバンドの一員。

お姉ちゃんもお兄ちゃんもそう。

私だけ違う。

私はこの学校に一年いる。

あともう二年いることになる。

一年生のころは発声や、歌い方を習う。

二年生はいろんな歌を歌いながら練習していく。

そして、三年生は、バンドのメンバーを決める。

これがこの学校のおきてみたいなもの。

私はもう三年生になる。

今日はとても大事な日。

だって、今日メンバーを決めるんだもの。

私には勝負の日なのだ。

おねがい、いいメンバーになりますように。

.....

そして、決まったのは……。

ギター かつこいいけどクールな男の矢筈やおい 坂夜さかよ。

ベース 元気でなつつこいかわい女の子の綾瀬あやせ 波なみ。

ドラム お調子者でやさしいお兄さんタイプの男の人の葵あおい 雄ゆう
途。うと

そして、ボーカルの私。

いいのか悪いのかよくわからない取り合わせ。

でも、決めてくれた審査の人たちはこのほうがいいと言った。

「じゃあ、まず自己紹介しようか？」

私は空気を盛り上げるために言った。

「小学生じゃないんだから。」

坂夜がガムをくちやくちやと音を立てながらあきあきして言った。

私はちよつとむかついた。

「じゃあさ、ニックネームつけない？」

波がにこつとしながら私に案を出した。

「それいいね。やろうよ。ね、歌ちゃん。」

雄途もその案に賛成した。

「そうだね。それならいいかも。」

私も賛成した。

「坂夜はクールだから…。」

私は人差し指をあごにくつつけて考えた。

「クーは？」

波が元気よく手をあげて発表した。

「あ、いいね。じゃ、クーで決まり。」

私は人差し指を坂夜に向け、まるで刑事が犯人を指すみたいなふうに坂夜に言った。

「ふ、もっとましなのねえのかよ。ていうか人に指さすんじゃないよ。」

坂夜は笑いながら言って、私の坂夜にむけた指をつかんでおろした。

（坂夜の手、冷たい。）

私の指をおろした後坂夜は学校を出て行ってしまった。

私はその後がちょっと気になってしまった。

「波は、「なー」でいいよ!！」

波はまるで犬がしっぽふってるかのように元気に言った。

私はそれが人目で気に入ってしまった。

「で、雄途は「ゆー」でいいんじゃない?」

雄途はちよつといやそうな顔をして苦笑いをした。

(思いつきりいやそうな顔してるなー雄途)

「別にみんな伸ばすようなニックネームじゃなくてもいいんじゃない?」

私は雄途を助けるために波を止めようとした。

そのとき、波は雄途に目をつるつるさせながら目をむけた。

「うん…。もういいよ、「ゆー」で。」

雄途は苦笑いであきらめながら言った。

(ある意味この子怖いなー。)

私はその光景を見てちよつとこう思った。

「歌ちゃんも歌ちゃんでもいいかも。」

なーは私を見ながら言った。

「どうして？」

私はなーに首をまげながらちよつと寂しげに言った。

「歌ちゃんはあんまりないんだよ。」

なーは何か悩みながら私に言った。

（ちよつとショックなんですけど…。）

私はなーの言葉を聞いたときそう思った。

「ねえ。」

いきなり雄途が私となーに話し始めた。

「わざわざニックネームなんてつけないでいいんじゃない？」

雄途はちよつとうつむいてぼそぼそと言った。

「『え？』」

私となーは一緒にそろって雄途に聞いた。

「だから、別にニックネームなんていらんないじゃないの？って。普通に名前で呼べばいいんじゃない？」

やない？坂夜は坂夜。波は波で、俺は雄途。歌は歌。でいいんじゃない？」

ない？ってこと。」

雄途はちょっと寂しげに言っていた。

「私も……そう思った。聞いてて。」

私は波にもうしわけなさそうに言う。

「そうなの？最初に言つてよ！！」

波は笑いながら私に言ってくれた。

多分私をかばってくれたんだと思う。

「じゃあ、みんなの下の名前のほう呼び合つてことで……！」

波は空気を変えてくれた。

（波ってすごい）

私はそれをみながらそう思った。

「坂夜も帰ったちゃったし、練習は明日ってことで。じゃあねー！」

波はベースギターを小さい体でかつぎながら笑顔で帰って行った。

「じゃあ、私達も帰ろうか？」

私は笑顔で雄途に言った。

「ああ。」

雄途はバチをバチ専用の袋に入れて、スクールバックに入れた。

「その袋、買ったの？」

私はバチ専用の袋を見て雄途に首をかしげながら聞いた。

「ああ、これは、自分で作ったの。ミシンでぬって。」

雄途はバチ袋を見せながらちよつと自慢げに笑顔で言った。

「すごい。超器用じゃん！！私全然作れないよ。しかも缶バッチとかカッコいい！！きゃー。他にも何か作れるの？」

私はしゃぎながら聞き返した。

「うん、手提げとか、携帯ケース（布の）マフラーとか編めるよ。」

雄途は私に優しく笑いながら言った。

「すごい！！」

私は思わず大きな声で言ってしまった。

「何か作ってあげようか？」

雄途は私の顔をみながら言ってくれた。

「え？本当？」

私はすつごく喜びながら言った。

「うん。何を作ってほしい？」

雄途は私に笑顔で言ってくれた。

「うん、あ、肩からさげるカバンちょっとおっきめの。」

私はちよつとゼスチャー的に手を動かしながら雄途に言った。

「つまりシヨルダーってこと？」

雄途はゼスチャー的な動きをみてクスクス笑いながら聞き返してきた。

「うん。いっぱい物が入るシヨルダー。」

私は雄途に笑顔で言った。

「わかった。缶バッチは付ける？」

こうしていろんな話で盛り上がった。

その時間はとても楽しくてかけがえのない時間となった。

2、坂夜…。

そして、乗り換えの駅についた。

そのとき…。

（ん？あれって坂夜？）

駅にいたのは女の人という坂夜。

その光景はいかにも恋人同士って感じで、とても楽しそうだった。

なぜか遠う存在に思えてしょうがない。

なんでだろう？

私は坂夜と女の人が何を話しているのか気になって、隠れながら坂夜と女の人に近づいてみた。

「今日は何したの？」

ちよつと高い声、多分女の人だと思う。

「今日はバンドのメンバーを決めた。結構変な奴等だった。」

坂夜は笑いながら女の人に言った。

私はちよつとムカツとしながら聞いていた。

「へー。面白いことになったらしいわね。」

女の人はおしとやかそう。

すごい落ち着いてる声だから。

私と正反対。

私はいつまにか落ち込んでいた。

（何で私、落ち込んでんの？）

私はこのときは気づいてなかったの。

これは恋なんだと。

君に捧ぐ歌 1 (後書き)

どうでしたか？ちょっと続きが気になるなって言う人はぜひ、見てほしいなと思っています。

また、月曜日くらいにだすので見てください。

君に捧ぐ歌第二部（前書き）

文字の変換がちがつてたり言葉があてはまっていなかったりかもしれないかもしれませんが、楽しんでみてほしいと思います。

君に捧ぐ歌第二部

君に捧ぐ歌

3、何なの？この気持ち…。

私は坂夜と綺麗な女の人の会話を聞くだけだった。

どうしてか、坂夜がとても遠くなっていくような気がする。

そのとき。

「ピーーーーーー！！！！二番線発射いたします。」

電車が発射しそうになった。

「ヤバッ！！！」

私は思わず大きい声で言ってしまった。

そのとき、坂夜に気づかれてしまった。

「お、お前何してんの？こんなところで。」

坂夜はびっくりした顔で私に恐る恐る聞いてきた。

「え、か、帰りの電車これだから。」

私は電車を指を指しながら坂夜に言った。

「へー。そうなんだ。あ、紹介してやるよ。俺の幼馴染の彩音崎百
合香。」
りか
あやねさき
ゆ

坂夜は横にいる女の人を紹介してくれた。

「え？幼馴染？彼女じゃなくて？」

私は思わず動いてしまった口をふさいだ。

「私達ってそんなに恋人同士に見えるの？」

女の人がちよつと困った顔をしながら私に聞いてきた。

「話してる様子を見てみると結構恋人同士に見えますよ。」

私は女の人に言った。

「...。」

坂夜はちよつと黙った。

（苦しそうな顔、どう考えたって百合香さんのこと好きでしょ。）

私は黙っている坂夜を見ながらそう思った。

心が苦しくてとても悲しくて。

なんだろうこの気持ち。

「こちらはどなたなの？坂夜。」

百合香さんは私を見ながら坂夜に聞いた。

「ああ、俺のバンドメンバーのボーカルをやる夢沢 歌。」

坂夜は私のことを見ながら百合香さんに紹介した。

「歌ちゃん？可愛い名前ねー。しかもボーカル担当なんてすごいばつちりじゃない。」

百合香さんは手を叩きながらうれしそうに言った。

「あ、ありがとうございます。」

私はちよつと照れながら言った。

「敬語なんてなくていいのよ。普通にお友だちになりましょう。」

百合香さんは優しく微笑みながら私に言ってくれた。

「はあ。」

私はちよつとうつむきながら言った。

「あの一、お取り込み中失礼ですか。はやく電車に乗らないと…。」

坂夜は私と百合香さんが話している途中に知らせてきた。

『あ!!!!!!!!!!』

私と百合香さんは大きい声で言った。

私と百合香さんと坂夜はいそいで走りながらギリギリで電車に乗り込んだ。

「坂夜、もうちょっとはやく知らせてよ。」

百合香さんは息を切らしながら坂夜に言った。

「わりいわりい、だって長く話してるから入り込めなかったんだよ。」

坂夜は百合香さんなだめるように言った。

「もう！足が痛くなったわ。」

百合香さんは足をさすりながら痛そうに怒りながら言った。

「ごめんって。」

坂夜は百合香さんに頭をかきながら言った。

そのシーンを見ていたら、私はとても入り込める隙間がないことを改めて知った。

そのシーンは私の頭をずっとかけめぐる。

うれしそうな坂夜と楽しそうな百合香さんそれはとても心にズキツとつきささった。

そのささったものは痛くてズキズキしてとても苦しい。

こんなのはじめて。

どうして?!。

そして、私の降りる駅についた。

私は何もなかったかのような顔をしてさよならをした。

どうしてかって？決まってる本当のことを坂夜や百合香さんにしられたくないから。

「今度お茶しましょうね。」

百合香さんはきれいな顔でニッコリと微笑みながら私を誘ってくれた。

「はい、ありがとうございます。」

私は百合香さんに笑いながら言った。

「また明日なー。」

坂夜はガムをくちゃくちゃ音をたてながら私にむかって手をふった。

「うん。」

私は元気よく返事をして手をふった。

「プシューー……。ガシャン。」

電車のドアが閉まった。

そして、私はその電車を最後まで見守っていた。

坂夜と百合香さんの笑顔を見ながら。

ちよっただけ冷たい風が髪と頬をなでる。

4、それぞれの思い。

翌日……。

私はいつものように学校につく。

そして、それぞれの小さいバンドの部室があるそして、私の部室は213号室。

ガチャッ

部室のドアを開けた。

そしたら、波だけがいた。

「おっはー！！歌。」

波は元気に私にあいさつをしてくれた。

「おはよ。」

私は波に笑顔で言った。

じー。

「何？」

私は波の目の視線を感じ波に聞いた。

「何か悩んでるね。その顔。」

波はニヤッとしながら私の顔を見ながら言った。

「どうしてわかったの?!」

私は昨日のことを昨日からずっと考え込んでいた。

「顔でわかる。ちょっとだけ元気がないのわかる。」

波はベースギターをみがきながら言った。

「悩んでるなら聞くけど？」

波は私に微笑みながら言ってくれた。

「あのね。昨日ね……。……だったの。どう思う？」

私は昨日のことを波に真剣に話した。

「ププ、あはははははははは。笑いすぎてお腹痛い。」

波はいきなり笑い出した。

「どうして笑うの？」

私は波に怒りながら言った。

「恋の一つも知らないの？」

波は笑いながら私に言ってきた。

「恋?!?!」

私は思わず大声で言ってしまった。

「あのね。それは恋。この人といると心臓がドキドキしちゃうとか。彼女がいたときに苦しくなっちゃうとか、みんな恋なの。わかった？」

波は私の顔を覗き込みながら自慢げに言った。

「う、うん。」

私はちよつとびっくりした顔をしながら言った。

それもそのはず私恋なんて生まれて初めてだもの。

「波は誰が好きな人とかいないの？」

私は波に思い切つて聞いてみた。

「あたし？あたしはいるよ。」

波はちよつとうつむきながら言った。

「でもかなわない恋だから。」

波は苦しそうに私に言った。

「どうして？」

私は波に聞き返した。

「どうしても、絶対教えないからね。」

波は私が「何で」という前に言った。

「…。」

私は黙った。

そのとき、ガチャッ…

ドアが開いて入ってきたのは雄途だった。

「おはよ。」

雄途はニコツとしながら私と波にあいさつをした。

「おはよう。」

私は普通にあいさつを返して。

「おっはー。」

波はちよっとおもしろいあいさつをした。

「歌、昨日これ作った。」

雄途は微笑みながら私に差し出したものそれは、ショルダーバックしかも今、人気のバンド

のメンバーの顔の缶バッチがついている。

布は黒色のきじで所々に白色の糸で星形に刺繍されている。

私のいかにも好きになるようなショルダーバック。

「きゃー。かっこいいー!!」

私はとても気に入ってしまった。

「気に入ってくれて満足満足。」

雄途は私の喜びの顔をながめながら笑った。

「ありがとう大事に使っね。」

私は雄途にお礼を言ってからボロツチイカバンから入っていた物を全部だして、雄途にもらったかっこいいショルダーバックに全部入れ直した。

「歌、あなた怖い女になるよ。きつと。」

波はニヤけながら私の耳元でボソツと言った。

「どういう意味？」

私は首をかしげながら波に言った。

「いずれわかるよ。」

波はそういつて、またベースギターをみがきに帰った。

「？」

私は首をかしげて声の調子を整えようと思い。

自動販売機に飲み物を買いにいこうとしたときいきなりドアが開いた。

そして、勢いよく入ってきたのは坂夜。

「いきなりどうしたんだよ。坂夜。」

雄途は坂夜に聞いた。

「はあ、はあ、はあ、ごめん、今はちょっと。」

坂夜は部室のソファに座った。

何か苦しそうに考える坂夜。

そんな坂夜を見ていると私まで苦しくなってきた。

私はとりあえず自動販売機に向かった。

そして、飲み物を私の分と坂夜の分を買って部室に向かった。

そして、なぜか部室のドアの前に雄途が立っていた。

「あれ？雄途どうしたの？」

私はボーツと立っていた雄途に聞いた。

「や、何か波が坂夜と話したいことがあるって言うから出てくれて言われてさ。」

雄途はちょっと聞き耳をたてながら私に言った。

「なんだろう?」

私はドアに耳をあてて聞き耳をたてた。

『あたし、何のためにこの学校に入っただか坂夜は知らないよね。』

部室から波の声が聞こえる。

その声はなんとなく真剣な空気が感じられる。

『……。』

坂夜何も話そうとしない見たい。

『あたし、あんたを追いかけてここまで来たんだ。つまり、あたしはあんたが好きってこと。』

波は苦しそうに坂夜に言った。

私はこの話を聞いて力がぬけて座り込んでしまった。

『だから何があったか知りたい。何があったの?』

波は坂夜に聞いた。

その聞いている声はほんのちょっと震えていた。

私はしらないうちに目から涙がこぼれ落ちていた。

カーン……。

私が持っていたジュース缶が私の手からこぼれ落ちた。

「どうしたんだよ？歌。」

雄途は私の腕をつかんでちょっとゆすりながら私に言った。

「ごめん、私…。」

バツ…。

私の腕をつかんでいる雄途の手を振りほどいて学校から出て行った。

「歌!!」

雄途の声が部室にも届いたみたいで部室から波と坂夜が出てきた。

「どうしたの？雄途。」

波は心配した顔をしながら雄途に聞いた。

「歌が学校から出て行っちゃった。」

雄途はびっくりした顔で波に言った。

カラー…。

「ジュース…。」

坂夜は歌が買ってきたジュースを手にとりながらいきなり走りだした。

「どこ行くんだよー！坂夜ー！！！」

雄途は坂夜を呼んだ。

しかし、坂夜は戻って来なかった。

雄途と波はちらばつて歌を探すことにした。

[illegible]

「はあ、はあ、はあ、ここにいたのか。歌。」

坂夜は公園のブランコに座っている私に向かってきて、隣のブランコに座った。

「どうして、学校からここに来たんだ？」

坂夜は私に聞いてきた。

「もう、いやなの。どうして私がこんなに苦しくならなきゃいけないのよ。」

私は自分の思いを言った。

「お前に何があったか教えてやるよ。波と雄途にはだまっとけよ。」

坂夜はため息を一回ついて、話し始めた。

「実は、俺百合香のことが好きでさ。告ったんだ。」

坂夜は苦しそうに私に話してくれた。

「で？返事は聞いたの？」

私は坂夜が百合香さんのことを好きなのは知っていたからあんまりびっくりしなかった。

「返事はまだ聞いてない。でも、ずっと隣守ってあげたいって思うんだ。それも好きってことに入るだろ？」

坂夜は私に聞いてきた。

「入るんじゃない？」

私はちよつと涙目になりながら言った。

「俺はあいつのこと一番わかるんだ。好きな人が俺じゃないことも人一倍泣き虫ってことも。全部わかってるんだ。だから……」

坂夜が話している途中に私は話した。

「わかってない！坂夜はわかってない。百合香さんのことも波のことも私のことも全部わかってない！！坂夜は誰よりも何もかも一番わかってない。百合香さんのずっと仲良しでいたいってことも、波が坂夜のことを追いかけてこの学校に入ったって事も、私の苦しい気持ちの意味も、全部わかってない！！」

私は思い切って思ってることを言った。

「？」

坂夜は私に呆然と視線を向けるだけだった。

「坂夜が全部傷つけてるよ…。」

私は泣きながら坂夜に言った後、坂夜から離れていった。

「全部…。」

坂夜はボソツと言葉を言った。

「歌。」

雄途が目の前に立っていた。

「歌、俺じゃ、だめ？」

雄途は私をやさしく抱きしめてくれた。

その雄途の腕の中はとても心地よくて暖かくて大きくて、まさに私の必要としている場だった。

私は何がしたいのか。

よくわからないよ。

私はどうしてあなたを好きになったのかな？ねえ、

坂夜。

君に捧ぐ歌第二部（後書き）

どうでしたでしょうか？楽しんでいただけてくれたでしょうか。
次の第三部で最終話なのでぜひ、見てください。

君に捧ぐ歌 第三部（前書き）

いよいよ最終話です。

最後まで読んでいただいてもうれしいです。

最後までゆつくり楽しみながら読んでいただけたらいいなと思っています。

君に捧ぐ歌 第三部

5、必要とするもの。

「歌は何がしたいの？坂夜を手に入れたいの？それともこのまま笑ってバンドをしていたいの？歌は何がしたい？」

雄途が私をやさしく抱きしめたまま、私の耳元に言った。

その声はとても優しくてちょっとだけ寂しそうな声だった。

「とりあえず座ろう？」

雄途は私の背中に回っている腕を放しながら座った。

「歌は恋で自分の幸せと人の幸せどっちを選ぶ？」

雄途はやさしく私に聞いてきた。

「？」

私は首をかしげながら考えた。

「たとえば、誰かに告白されたとして、その人のことを好きじゃないとする。断るか、つきあうか。歌はどっち？」

雄途は私に聞いた。

「わかんない。」

私はうつむきながら言った。

「もし、断ったら、相手のほうがかわいそう。でも、好きでもないのにつきあいたくない。でも、つきあったらいい人だったとか何かいいことを知れるかもしれないよね？」

雄途は私の顔を覗き込みながら私に言ってきた。

コクン…。

私は首を小さくうなずいた。

「みんなその気持ちなんだよ？坂夜も波も歌も僕も。みんなその気持ち。はつきり好きって言いたい、でも、言ったら相手が苦しいかもしれない。みんなそんな気持ちなんだ。坂夜だけをせめるのはいけない。わかるかい？」

雄途は本当にすごい。

私の苦しい気持ちがわかるんだもん。

「恋っていうのは本当に難しいよ。でも、もしかしたらハッピーエンドだってあるかもしれないんだよ？だから、恋ができるっていいと思うよ僕は。」

雄途は私の涙目の顔を覗き込みながら言ってくれた。

「だから、決してあきらめたりなげたりするのはしないではない。
い。」

雄途はそういつて立ち上がり、私に手を差し伸べた。

「わかった。」

私は涙をふいて雄途の手をかりて立ち上がった。

「ありがとう、元気が出た。」

私は笑って雄途にお礼を言った。

「うん。さ、もどろろ。波と坂夜も呼んでごよう。」

雄途は私に優しく言うてくれた。

「うん。」

私と雄途はそう言うてさっきの公園に戻った。

そして、見てしまった。

坂夜と波がキスしているところを…。

そのときに思った、波も坂夜を必要として私も坂夜を必要として
るんだってことを……。

「坂夜！！あんたは…あんたは百合香さんが好きなんじゃないの！

「？」

私は思わず言ってしまった。

「どうして波とキスなんかしてんのよ。最低！！…最低だよ……。」

私はそういつて座り込んだ。

「ちがうの歌、あたしが勝手にしただけだから。大丈夫、坂夜からしたんじゃないから。」

パンッ

私は思いつきり波の頬を叩いた。

「波は応援してくれてたんじゃなかったの？今頃何よ坂夜が好きって。どうして、どうしてあ

のときに言ってくれなかったの？波、ひどいよ。」

私は波に言いつて離れて行つた。

「俺、今日は災難な日だな。歌には怒られるわ、波にはキスされるわ。」

坂夜は頭をかきながら言つた。

「あたしは坂夜をなくさめようとして、キスしたんだよ！！」

波は怒つたように坂夜に言い放つた。

「キスはそういうふうに使うもんじゃねえよ。」

坂夜はそう言って公園から出て行った。

「このチームバンドどうなるんだろうな。先が思いやられるね？
波。」

雄途は波に優しく言った。

「うん、本当にどうなるんだろうね。あの話のときに坂夜が好きって言っただけよかったな。歌に。」

波はいつのまにか赤くなっていた空を見上げながら悲しそうに言った。

6、君という存在。

翌日……。

私はいよいよ学校に向かった。

そして、あつというまに部室の前。

ガチャッ

「おはよう。」

私は部室に入りボソツと言った。

「おっはー、歌。」

波は元気よく私にあいさつしてくれた。

「波、昨日はごめんね。」

私は波に小さい声であやまった。

「うっん、全然、私が言わなかったのが悪いんだし。こっちこそめん。」

波はやさしく私に言ってくれた。

「これからは、何でも相談して何もかも相談にのる。約束。」

波は私に小指を差し出した。

「うん。」

私は波の小指に小指をかけた。

小さいころをちょっと思い出す、微笑ましい瞬間だった。

ガチャッ

部室のドアが開いた。

そして、開いたドアから出てきたのは坂夜。

「おっはー。坂夜。」

波は坂夜に元気よくあいさつした。

「……。」

坂夜は黙っていた。

その顔はとても苦しそうで今にも泣き倒れそうなぐらいの顔だった。

「坂夜、どうしたの？」

私は恐る恐る坂夜に聞いた。

「振られた。」

坂夜はそういつて部室のソファにもたれながら泣き顔を隠した。

泣いてるのなんてわかるよ。

それほど百合香さんを好きだったってことも私はわかるよ。

人一倍あなたを好きなんだから。

「坂夜。私ね、人をはじめて好きになったの。でも、それはかなわない恋かもしれない。でも、その少しでもかなう可能性がある恋はあきらめちゃいけないんだよ。」

私は雄途から教わったことを坂夜に教えた。

「は？」

坂夜は涙目で私の顔を見てきた。

「坂夜はまだ本当に人を愛してないよ。だから、この場所にいるんだよ？もし、坂夜があきらめるために百合香さんに告白したのならきつちりけじめをつけて、また違う恋をさがせばいい。あきらめないでがんばって振り向かせたいのならアタックしていく。そのどっちかしかないんだよ？結局はもう昨日の自分じゃないんだから一歩ずつ進んでいかなくちゃ。」

私はいつのまに目から零れ落ちる涙拭いながら坂夜に言った。

「ありがとう。歌。でも、俺、あきらめる。もう自分の気持ちに気がついたから。」

坂夜は涙目で私に微笑みながら言った。

「自分の気持ち？」

私は涙を拭いながら坂夜に聞いた。

「百合香にも一回会ってけじめつけてくる。それで、自分の気持ちをお前に伝える。」

坂夜は涙目から輝く目に変えた。

「ちょっと逢いに行ってくる。」

坂夜は笑顔で部屋を出て行った。

私はそのときふっと、頭の中に詩がよぎった。

こんな詩。

題名：君に捧ぐ歌

詩

愛する人に送る歌

ずっとあなたを見ていたのにあなたはわかっていない

そのきずかないあなたにこの歌を送ります

好きなことを隠し、笑いながら進む道で君は僕のほつをむき
ツと笑う

その顔が僕は好きなんだ。

愛してるって、何で言えないのかな？

どうして、好きって言えないのかな？

どうして、小さい頃に言えたことが言えなくなるのかな？

一生この言葉と歩んでく道で試練なのかな？

あなたの笑顔が見ただけじゃいけないのかな？

このくらいの詩が頭によぎった。

この詩は今の私のようにとても私はうれしかった。

私はこの詩を手直しして、発表会で歌うことにした。

大好きな人を思う気持ちきつとみんな変わらないと思うんだ。

みんな精一杯人を愛しているんだ。

私もがんばんなきゃ。

ガチャン。

ドアが開いたそして、入ってきたのは坂夜だった。

「はあ、はあ、はあ、俺、歌が好きだ。」

坂夜は息を切らしながら突然私に言ってきた。

「いきなり何言い出すの？坂夜。あなたは百合香さんが好きなんじゃないの？」

私は驚き気味に聞き返した。

「俺、昨日すっごい考えたんだ。俺本当に百合香のこと好きだった

のかな？つてずっと。その

ときに歌が言ってくれたことでわかった。誰もかも傷つけちゃって
たんだなってだから俺が本当に好きだったのは歌、お前なんだよ。」

坂夜はズルいよ。

そんなかつこよくきめないでよ。

そう思いながら、目から頬を伝う涙は何よりもうれしい気持ちを
あらわしたものだつた。

「私も好きだつたんだ。」

私は泣きながら坂夜に言つた。

「坂夜、私書いたんだよ？愛する人への歌。」

私はそう言つて坂夜に渡した。

私のさっきの揺れてた心。

「本当は雄途つて歌が好きだつたでしょ？」

波は坂夜と歌にわからないくらい小さい声で言つた。

「ああ、でも、いいんだ。歌が笑つててくれれば。僕はそれで幸せ
だから。」

雄途はちょっと寂しそうに坂夜と歌をながめながら言った。

「じゃあ、私達もつきあう?」

波が言った。

「そうだね。」

雄途は笑っていった。

いつまでも、あなたを思い続けるよ。

あなたに捧げるよ。

この歌を。

マイ メロディ
my melody

君に捧ぐ歌 第三部（後書き）

最後まで読んでいただきまことにありがとうございました。

この小説をかきたいなと思ったのは歌を歌ってたときに好きな人のことを詩に書いた歌を歌ってたから私も書いてみたいと思ったからです。

えらそうなことを書いてもうしわけありません。

字や言葉、まちがってたところもあったかもしれませんが。最後まで読んでいただきまことにありがとうございます！。

できるだけ感想・評価も書いていただきたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7392d/>

君に捧ぐ歌

2010年10月20日12時20分発行